

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：35506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463602

研究課題名(和文) 配偶死別後の独居高齢者のスピリチュアリティ支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Spirituality Support Program for the Elderly Living Alone after Bereavement

研究代表者

生田 奈美可 (Namika, Ikuta)

宇部フロンティア大学・看護学部・准教授

研究者番号：70403665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、配偶者との死別を後独居となった高齢者のスピリチュアリティについて、心理プロセスを質的に分析するとともに、配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度；Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse(以下SAS-EBLS)を用い、スピリチュアリティ状況の把握をし、スピリチュアリティ支援プログラムを確立することであった。心理プロセスについて、10名の対象者のインタビューデータを質的に分析した。また112名の対象者調査から、対象者のスピリチュアリティの因子構造を確認した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to qualitatively analyze the psychological process of the spirituality of the elderly living alone after being bereaved of their spouses, and to establish a spirituality support program for such people. In order to understand the condition of their spirituality, the Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse was used. Interviews with 10 participants revealed that Negative Emotions immediately following the bereavement changed to Positive Consciousness of Their Own Life Thereafter, through Connections with their families and others. A questionnaire survey administered to 112 respondents indicated that the spirituality of the participants consisted of two factors and 21 items. The first factor was Harmony with Self, Others and Environment while the second factor was Re-arranged Transcendence of the Departed. It also became evident that the spirituality of the elderly was related to their mental health.

研究分野：老年看護

キーワード：スピリチュアリティ 独居 高齢者 配偶者死別 心理的適応

## 1. 研究開始当初の背景

超高齢社会を迎えて久しい昨今、内閣府高齢社会白書(内閣府, 2012)によると、我が国の独居高齢者世帯数は5,018千世帯と増加している。今後、地域で生活する独居高齢者が増加することは明らかであり、独居高齢者の心身の健康維持や生活支援は、重要な保健・医療・福祉の課題となっている。本研究は、独居高齢者が抱える心理的課題について、スピリチュアリティに視点をおき、超高齢社会の伸展に伴い需要と期待が高まる支援についての実証的検討を行う。我が国における保健医療の課題における、スピリチュアリティに関する学術的関心は高まっており、高齢者スピリチュアリティの概念検討(竹田, 太湯, 2006)及び尺度開発(竹田, 太湯, 桐野他, 2007)がされ、スピリチュアリティが高齢期の人々の健康やQOLを考慮するにあたり重要な概念であると報告されている。研究代表者は、これまでに配偶死別高齢者のスピリチュアリティについて、以下の検討を進めた。まず、高齢者のスピリチュアリティの様相を、配偶者との死別経験の有無別に、出現の程度と構造について比較検討を行った(生田, 田中, 2012)。次に、配偶死別高齢者スピリチュアリティ概念の因子構造を帰納的に抽出し(生田, 2011)、その因子構造の信頼性・妥当性を検証した後、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ尺度を開発した(生田, 2012a)。最後に開発された尺度を用いた臨床応用へ向けて観察モデル(研究計画・方法、図1参照)を提示した(生田, 2012b)。これらの結果から、配偶者と死別を経験した高齢者の心理的課題について、精神的健康が有配偶者よりも顕著に悪く、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ構造は、有配偶高齢者のスピリチュアリティ構造と異なることが示され、配偶者を亡くした高齢者のスピリチュアリティについて検討の必要性が明示された。さらに、配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度；

Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse (以下 SAS-EBLS とする)を開発、信頼性・妥当性を検討、評価を得た後、最終的に、SAS-EBLS 下位尺度を用いた一般的臨床応用へ向けた具体的方策の一步として、スピリチュアリティ観察モデルの提示まで、検討を進めている。

これまでの検討を踏まえ、本調査においては、我が国における配偶死別後の独居高齢者における心理的適応について、そのプロセスを明らかにした上で、SAS-EBLSによる介入モデルの検討・評価を行う。スピリチュアリティを考慮した支援プログラムを提示することは、独居高齢者の精神的健康、さらにはQOLを考えるにあたり重要な課題であるといえる。

## 2. 研究の目的

本研究目的は、配偶者との死別を経験した高齢者のスピリチュアリティを測定するために研究代表者が開発した配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度；SAS-EBLSを配偶死別後の独居高齢者に適用し、そうした人々のスピリチュアリティ支援プログラムの開発を行うことである。

具体的にはまず、配偶者との死別経験後の独居高齢者の心理的適応プロセスについて、内容分析を用い明らかにする。さらに、そうした対象の臨床応用に向けた、SAS-EBLSによるスピリチュアリティ状況の把握と評価により、支援プログラムの確立を図る。

## 3. 研究の方法

1) 配偶者と死別後の独居高齢者の心理的適応プロセスを内容分析

(1) 研究デザイン：質的帰納的研究方法

(2) 研究対象者

配偶者との死別を経験したことについての経験や体験を想起し語ることは、対象者に

とって精神的苦痛を伴う可能性があることを考慮し、死別後期間を半年経過しているものを対象とした。対象者の選定にあたっては、研究代表者、研究分担者の各地域において、行った。10名を選定した。

### (3) データの収集方法

対象者1人に対して約1時間の半構成的面接を行った。面接はプライバシーが守れる個室で実施し、内容は対象者の了解を得て録音した。半構成的面接におけるインタビューは、対象者が配偶者との死別経験直後から、各法要時期から現在の心理状態、故人を亡くしたことでの生活の変化、感情の動きについて、インタビューガイドに基づいて行った。

### (4) データの分析方法

録音した面接内容から、逐語録を作成し、データとした。テーマに関連のある対象者の心理的適応までの感情、行動に着目し、コード化、カテゴリー化、ストーリーラインを検討した。

### (5) 倫理的配慮

対象者の権利を保護するために、研究への参加は自由意志であり、いつでも研究を辞退でき不利益は被らないこと、研究者の守秘義務、データの保管などについて説明し、同意書を取得し、同意が得られたもののみを対象者とした。本調査は、宇部フロンティア大学倫理委員会からの承認を受けて実施した。

## 2) 配偶者と死別後の独居高齢者スピリチュアリティの因子構造と関連要因の検討

### (1) 研究対象者

対象者は65歳以上の配偶者と死別後の独居高齢者255名であった。

### (2) データ収集方法

県内外の在宅医療・介護福祉・訪問看護に

関わる施設に調査票を送付した。対象施設の看護管理者を通して無記名自記式アンケート用紙を対象者に配布してもらい、返信用封筒にて個別に返信してもらった。また、各施設でとりまとめた調査票を研究代表者が受けとった。

### (3) 質問紙の構成

質問紙は、対象者の属性、社会的繋がりについて、1.あなたは、一般的な人は信頼できると思いますか。(信頼感) 2.あなたは、ご近所の方と日用品の貸し借りをしたりおすそわけをしたりするなどのおつきあいをどの程度したおられますか。(互酬性) 3.あなたは地域活動(町内会、自治会など)への参加について、どの程度参加していますか。(コミュニティ)の3項目、5段階のリッカートスケール(1~5点) SAS-EBL(配偶死別高齢者スピリチュアリティ)26項目、精神的健康度、1.明るく、楽しい気分で過ごした。2.落ち着いた、リラックスした気分で過ごした、3.意欲的で、活動的に過ごした、4.ぐっすり休め、気持ちよくめざました、5.日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった、の5項目、6段階のリッカートスケール(0~5点)とした。

### (4) データの分析方法

配偶者との死別経験後独居となった高齢者のスピリチュアリティについて、SAS-EBL26項目を用い、基本統計量の算出、因子分析、社会的繋がり、精神的健康度との関連を検討した。分析は、統計学パッケージSPSS19.0J for Windowsを用いた。

### (5) 倫理的配慮

質問紙ごとに研究目的、協力の自由意志とデータの守秘、目的外に使用しない旨の依頼文を添付し、郵送、回収箱への投函をもって同意とみなした。

#### 4. 研究成果

##### 1) 配偶者と死別後の独居高齢者の心理的適応プロセスを内容分析

配偶者との死別を経験した独居高齢者のスピリチュアリティは、5つのカテゴリー【心理的麻痺状態】、【共有した行動や感情】、【思い出す】、【遺してくれたものやこと】、【肯定的意識】で構成された。以下、ストーリーラインを示す。

配偶者との死別直後は、葬式や公的手続に関連した忙しさによる【心理的麻痺状態】が出現した。その後は徐々に亡くなった配偶者と【共有した行動や感情】を、日々の生活の中で【思い出す】ことの哀しみや寂しさを感じていた。悲しみや寂しさといった感情は、亡くなった配偶者が【遺してくれたものやこと】、子供や孫、他者との関わりの中で、次第に自分自身の今後の生への【肯定的意識】へと変化していった。

##### 2) 配偶者と死別後の独居高齢者スピリチュアリティの因子構造と関連要因の検討

###### (1) 対象者の属性

250名の対象者のうち、欠損のない112名のデータを対象とした(有効回答率43.9%)。対象者の平均年齢は79.4(±6.10)歳、性別は、男性15名、女性97名、職業有が16名、職業無が96名、趣味有が93名、趣味無が19名であった。死別後平均期間は、10.8±9.2年、結婚平均期間は、46.3(±12.9)年であった。

以下、社会的繋がり、精神的健康度の平均点(標準偏差)を示す。

表1. 対象者の社会的繋がりと精神的健康度

		平均点	標準偏差
社会的繋がり	1. 信頼感	3.22	1.18
	2. 互酬性	3.04	1.37
	3. コミュニティ参加	3.29	1.09
精神的健康度	1. 明るく楽しい気分	3.48	1.38
	2. 落ち着いたリラックスした気分	3.63	1.39
	3. 意欲的、活動的	3.41	1.53
	4. ぐっすり休め、気持ちよく目覚めた	3.61	1.39
	5. 興味のあることがたくさんあった	3.34	1.64

###### (2) スピリチュアリティと対象の属性との関連

スピリチュアリティ総得点について、対象の属性との関連を検討した。

その結果、スピリチュアリティ総得点は、女性105.6(±15.9)点、男性97.1(±13.6)点で、男性に比べ女性のほうが有意に高かった( $p<0.05$ )。またスピリチュアリティ総得点は、趣味有は107.0(±15.4)点、趣味無は91.9(±10.9)点で、趣味無に比べ趣味有

のほうが有意に高かった( $p<0.01$ )。職業有無では差はなかった。

次にスピリチュアリティ総得点について、社会的繋がり3項目について、強い群、弱い群別に検討した。その結果、社会的繋がりについては、スピリチュアリティ総得点に差はなかった。

最後にスピリチュアリティ総得点について、精神的健康度の5項目について、良い群、悪い群別に検討した。その結果、「1. 明るく、楽しい気分で過ごした」については、良い群は110.1(±14.7)点、悪い群は96.3(±13.8)点で、悪い群に比べ、良い群は有意に高かった( $p<0.01$ )。「3. 意欲的で、活動的に過ごした」については、良い群は111.2(±13.0)点、悪い群は95.1(±14.6)点で、悪い群に比べ、良い群は有意に高かった( $p<0.01$ )。「4. ぐっすり休め、気持ちよくめざました」については、良い群は109.1(±13.8)点、悪い群は95.4(±15.5)点で、悪い群に比べ、良い群は有意に高かった( $p<0.01$ )。「5. 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」については、良い群は108.3(±14.6)点、悪い群は98.0(±15.8)点で、悪い群に比べ、良い群は有意に高かった( $p<0.01$ )。「2. 落ち着いた、リラックスした気分を過ごした」については有意差はなかった。

###### (3) SAS-EBLSを用いた配偶者を亡くした経験をもつ独居高齢者のスピリチュアリティの因子構造の検討(n=112)

まず26項目での因子分析を行い、固有値およびスクリープロットを確認した。これを踏まえ因子数をかえながら主因子法、プロマックス回転にて分析をすすめ、最終的に因子数を2とした。因子抽出のプロセスにおいて、因子負荷量が0.41未満の項目、因子毎の修正済み項目合計相関が0.3未満の項目、内容妥当性の検討により因子内の当てはまりが

悪い項目を三駆除した。最終的な因子分析にて安定した2因子21項目が抽出された。

第1因子は“友人との繋がりがあがる”“他者に感謝している”“自然に対して畏敬の念をもっている”“自分とはなにかを考へることがあがる”“生きる意味について考へる”など、19項目で構成され、「自己・他者・環境との調和」とした。第2因子は、“亡くなった配偶者に語りかける”“亡くなった配偶者に守ってくれるようにお願ひする”の2項目で構成され、「亡くなった個人の超越性への再配置」とした。

上記結果から、以下を考察した。

配偶者との死別を経験した独居高齢者のスピリチュアリティは、5つのカテゴリー【心理的麻痺状態】、【共有した行動や感情】、【思ひ出す】、【遺してくれたものやこと】、【肯定的意識】で構成されていた。配偶者との死別直後の心理的麻痺状態は、長年連れ添ってきた対象喪失を受け入れることができず、悲しみや悲嘆の感情をもった。しかし葬式や公的手続きを執り行わなければならない立場にある対象者は、悲しみの感情を押し止めながら、そうした状況を乗り越えていった。その際、成人となった子供から感情的、物理的、心理的支援を受けることに感謝していた。さらに、1年までの各法要のポイントにおいて、亡くなった故人を思ひ出し、一緒に行った日々の家事や生活行動を思ひ出したり、故人が好きだった食べ物を見て懐かしく思ったり、好きだったものをみて切ない感情に陥る対象者もいた。思ひ出すことは、どの対象者も行っていたが、その感情の只中においては悲しみよりも懐かしさや故人への感謝の気持ち、自分や子供や孫を守ってくれる存在としての再配置をしていた。故人が遺してくれたものやことには、様々なものがあるが、一番大きな存在としての子供や孫との繋がりを実感することに生への感謝、活力を見出していた。さらには、他、自らの趣味や故人が遺してくれた友人との人間関係のなかに生きる意味や目的を見出す対象者もいた。そうした中で、故人と過ごした長い年月が夫婦としての誇りとなり、自らが一人で生きていく、自らの価値を認める、といった肯定的意識をもつようになった。

死別後期間による対象者の感情や生活行動の変化について、適応プロセスを理論化していくことが必要である。対象者を今後増やしていく。

また、配偶者と死別後の独居高齢者スピリチュアリティの因子構造と関連要因の検討

については、スピリチュアリティ総得点は、女性、趣味有が高かった。趣味は、唄や写経、故人の本づくり習い事などが挙げられた。地域コミュニティの中で、対象者が人々と関わり、繋がりを継続したり再開したりすることで、一人になる時間を少なくすることができていた。また、精神的健康度は、「2. 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」以外はスピリチュアリティ総得点が、良い群のほうが高かった。スピリチュアリティは精神的健康度に規定されることが示された。精神とスピリチュアリティは、同義語としては用いられないが、精神を包含する概念としてのスピリチュアリティの重要性が示された。因子分析によって、配偶者との死別を経験した独居高齢者のスピリチュアリティは、2因子21項目で構成されることが確認された。配偶者を亡くした経験をするによって、遺された遺族は、自己の感覚、自己概念を他者や環境との調和の中でより深く捉えることになり、亡くなった配偶者について、自分を守ってくれる存在として、超越したものへの再配置を行っていた。配偶者喪失後独居となった高齢者の人々は、故人との関係を自らの生活の中で思ひながら、自らの存在を強く意識し、一人で生きていく歩みをはじめていた。

以上のように、配偶者を亡くした独居高齢者のスピリチュアリティの因子構造が示され、精神的健康度を考慮した支援プログラムを提示した。今後、対象者を増やし、地域においてそのプログラムを対象者に応用していくことを課題とする。

#### 引用文献

生田奈美可、配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティに関する質的研究、日本看護研究学会雑誌、34(2)、97-107、2011

生田奈美可、死別による配偶者を亡くした高齢者のスピリチュアリティに関する研究、山口県立大学大学院健康福祉学専攻博士論文、第5章、2012a

生田奈美可、死別による配偶者を亡くした高齢者のスピリチュアリティに関する研究、山口県立大学大学院健康福祉学専攻博士論文、第6章、2012b

生田奈美可、田中マキ子、配偶死別高齢者の精神的健康の諸相 - 有配偶高齢者との比較から -、宇部フロンティア大学看護学ジャーナル、5(1)、1-10、2012

竹田恵子、太湯好子、日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討、川崎医療福祉学会誌、16(1)、53-66

竹田恵子、太湯好子、桐野匡史他、高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発 - 妥当性と信頼性の検証 -、The Journal of Japan Academy of Health Sciences、10(2)、63-72、2007

内閣府、高齢社会白書、[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/gaiyou/s1\\_2\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/gaiyou/s1_2_1.html)、2004

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

生田奈美可、佐藤美幸、清水佑子、配偶者を亡くした経験をもつ高齢者のスピリチュアリティ尺度 (Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse) 開発の試み：宇部フロンティア大学看護学ジャーナル、Vol. 8、No. 1、2016

〔学会発表〕(計 4 件)

生田奈美可、我が国の看護系大学におけるスピリチュアル教育内容の文献的考察、日本臨床死生学会第 19 回大会抄録集、57、2013

生田奈美可、配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティへの回想法の効果に関する研究、日本臨床死生学会第 21 回大会抄録集、83、2014

生田奈美可、看護師のスピリチュアリティに関する文献検討、日本臨床死生学会第 20 回大会抄録集、44、2015

生田奈美可、配偶死別経験後の首都圏在住独居高齢者の心理的プロセスの質的検討、第 35 回日本看護科学学会学術集会、700、2015

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

公開講座、ヒューマンケアとスピリチュアリティ、スピリチュアリティから捉えた対象喪失とその支援、平成 28 年 3 月 27 日 (日) 開催

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

生田 奈美可 (Nanika Ikuta)  
宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科・准教授  
研究者番号：70403665

##### (2) 研究分担者

弓山 達也 (Tatuya Yumiyama)  
東京工業大学大学マネジメントセンター・教授  
研究者番号：40311998

廣瀬 春次 (Haruji Hirose)  
山口大学医学系研究科看護学専攻・教授  
研究者番号：30181209

梅木 幹司 (Motoshi Umeki)  
至誠館大学ライフデザイン学部：准教授  
研究者番号：50572195

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：